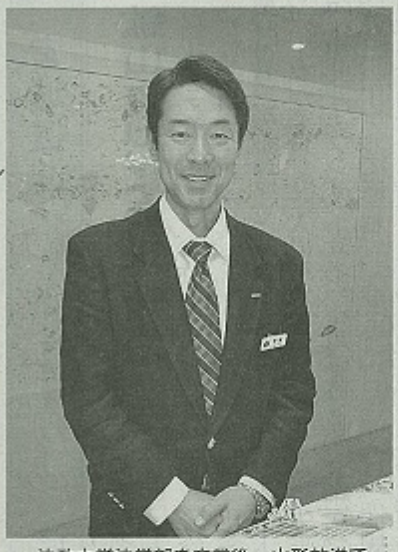
一緒にがんばる 復興の助っ人たち ⑱

元局アナ 観光に尽力

新潟市から南三陸町へ

齊藤（さいとう） 修（おさむ） さん（55）



法政大学法学部を卒業後、山形放送で8年間、新潟総合テレビで9年間、アナウンサーとして情報番組やスポーツの実況などを担当した経験を持つ。趣味はバードウオッチングとカメラ。

南三陸ホテル観洋でフロント業務を担当する。遠方から訪れる宿泊客の対応に加え、結婚式の司会も担当。もともと、地方テレビ局のアナウンサーだっただけに、軽快なトークと〝美声〟で多くの人たちを魅了する。

新潟県新潟市出身。大学卒業後、子供の頃から憧れだったアナウンサーを目指し、山形県内のテレビ局に入社。夕方のニュース番組などのキャスターやラジオのDJを勤めるなど、「地元では知らない人はいない」存在だった。

東日本大震災が運命を変えた。当時、勤めていた新潟県内のテレビ局で取材の準備に当たっていた最中に突然、大きな揺れに襲われた。

「自分は新潟中越地震も経験しました。でも、それをはるかに上回る強い揺れでした」。後輩記者たちが伝える被災地での津波被害の映像などを見て、「何もできない自分が歯がゆかった」と振り返る。

少しでも被災地の力になりたい―。年齢的にも、アナウンサーとしての〝潮時〟を考えていた時だった。登録していた就職サイト「リクナビ」を通じて偶然、南三陸ホテル観洋と出会い、2012年秋、同ホテルで住み込みで働き始めた。

語り部の一人として、地元住民から聞いた震災当時の状況などを観光客に伝える役目も担う。

「自分は被災していませんが、アナウンサー時代を含めた外からの視点も取り入れながら、災害の教訓や命の大切さを伝えられるよう心掛けています」と語る。

南三陸に移り住んで4年。ホテルのスタッフをはじめ、多くの町民の支えで毎日充実した日々を過ごせていることに感謝する。

「この町には、前を向いて歩んでいこうという多くの町民の皆さんがいる。南三陸の魅力を少しでも伝え、〝また来たい〟と思ってもらえるようなお客様を一人でも増やしたい」。第二の人生に、決意を新たにする。

感謝の言葉

南三陸ホテル観洋
阿部憲子おかみ

「これまでの経験を生かし、ぜひ町の復興の力になってほしいと思っています」

2016年7月2日　【三陸新報】